

JAFP
一般社団法人

日本家族心理学会

ニュースレター No. 63

〒113-0033 東京都文京区本郷2-40-7YG ビル5F TEL&FAX 03-3812-1575

Email: jafp-office@heart.so-net.jp URL: <https://jafp-web.org/>

日本家族心理学会第43回大会

京都大会 テーマ『家族支援をアップデートする-for から with Family へ-』

2026年8月28日(金)～30日(日) 龍谷大学 大宮校舎(京都府 京都市)



大会長 吉川 悟 (龍谷大学)

大会準備委員会事務局長 赤津 玲子 (龍谷大学)

※京都市内のホテルは非常に多いものの、予約が取りにくいいため、早めにご予約していただくことをお勧めいたします。

国際家族心理学会 第10回記念大会・日本家族心理学会 第42回大会報告

2025年8月9日(土)から11日(月・祝日)に開催された国際家族心理学会(IAFP) 第10回記念大会・日本家族心理学会(JAFP) 第42回大会にご参加くださいました学会員の皆様、ありがとうございました。皆様のおかげをもちまして、無事、閉会することができました。心より深く感謝申し上げます。国際卓越大学の最初の認定校となった東北大学での国際学会とあって、本学研究科長や事務長も大歓迎で開催させていただきました。

大会参加に関する各参加者数: 大会参加:対面 224名、オンライン 151名

発表: 日本家族心理学会大会発表 計41件(ポスター:19件、口頭:11件、事例:6件、自主シンポジウム:5件)

国際家族心理学会 大会発表 計43件(ポスター:25件、口頭18件)

なお、今 IAFP 大会ではポスター発表賞を参加者の投票に基づき、ボードメンバーで決定させていただくこととしました。JAFP でもそのような取り組みをすすめていただけることを願っております。

以下、大会準備委員会一同より改めて感謝申し上げます。

大会長 若島 孔文 (東北大学) 副大会長 平泉 拓(宮城大学) 大会事務局長 高木 源 (東北福祉大学)

大会準備委員: 花田 里欧子(東京女子大学)、生田 倫子(神奈川県立保健福祉大学、兪 幀蘭(宮城学院女子大学)、小岩 広平(北海道教育大学)、鴨志田 冴子(山形大学)、萩臺 美紀(岩手大学)、神谷 哲司(東北大学)、安保 英勇(東北大学)、本田 奈美(東北大学)、前田 駿太(東北大学)、吉田 沙蘭(東北大学)、シュレンパル レナ(東北大学)、坂本 一真(東北大学)

学会に参加して

鈴鹿医療科学大学 医療科学研究科 修士2年 片岡 廉

昨年学会スタッフとして運営に携わらせていただいた片岡廉と申します。長髪の男なので覚えてくださっている方もいると思います（数名の方が去年もいましたよね！と声をかけていただいて嬉しかったです）。今回は、一参加者として学会に参加させていただきました。国際学会と合同開催とのことで、非常に刺激を受け学びのある学会でした。私は、合気道の体験や懇親会にも参加しました。合気道は初めてで、力を入れずとも相手を崩せるという何とも不思議な体験でした。私の同期も学会には参加していたのですが懇親会には参加せず「場違いだよなあ」と思いながら参加しましたが、おいしい料理とお酒、「君とタッチ」というアクティビティ、歌に演奏と盛りだくさんで楽しむことができました。また、修士2年と言うこともあり進路に悩んでいましたが、学会事務局の谷口さんがいろいろな方を紹介してくださり、先生方のお話を聞くことができ、進む道が少し明確になったように思います。次の学会には学生ではなく心理師として参加できたらよいなと思っています。改めて、発表者の皆様、運営の皆様すばらしい学会をありがとうございました。

国際家族心理学会に参加して

常葉大学教育学部 清水溪介

日本家族心理学会と国際家族心理学会の合同開催となった今年度の大会は、私にとって初めての国際学会参加となりました。コロナ禍や学生ゆえの経済的事情に阻まれ、国際学会参加がなかなか叶わずにいましたが、こうして（日本開催とはいえ）初めての国際学会に参加することができ、大変貴重な機会となりました。

さて、今年度の大会では、国際家族心理学会でのポスター発表を行いました。初めての英語での発表ということもあり、ポスター作りから当日の原稿作成まで不安の連続・・・発表前日も夜遅くまで練習をして臨みました。当日は、多くの方に発表を聞いていただくことができました。実際には、日本語での説明を求められることも多かったのですが、海外の先生と英語で議論することもでき、有意義な発表となりました・・・とはいえ、英語でのやり取りは大変たどたどしいものであり、練習の成果もそこまで発揮できず、また先生方からの質問に十分に答え議論することができたかという点、不甲斐なさも残る結果となりました。

次回以降の国際学会では、より成長した自分で参加できるよう、未来の自分に期待したいと思います。最後にはなりますが、シンポジウム、ワークショップ、懇親会に抹茶体験等々・・・大変充実した大会を運営していただいた事務局の皆様感謝申し上げます。

国際家族心理学会に参加して

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 工藤笑莉榊

このたび、2025年8月9日から11日にかけて仙台で開催された国際家族心理学会に参加いたしました。初めての国際学会参加であり、大変貴重な経験となりました。

私はポスター発表の機会をいただき、若年女性の摂食障害傾向と家族の感情表出（Expressed Emotion; EE）の関連について報告いたしました。発表の際には、国内外の研究者から多くの質問やコメントをいただき、自身の研究を異なる文化的背景や臨床経験をもつ方々に伝える難しさを改めて実感する機会となりました。特に、尺度の妥当性検討や国際比較の可能性に関していただいたご指摘は、今後の研究を発展させる上で大変参考になりました。また、講演を拝聴する中で、国際的に縦断的な視点が重視されていることを実感し、今後の研究の展望について考える上で、重要な示唆を得ることができました。さらに、同世代の大学院生との交流を通じて、研究に対する姿勢や将来のキャリア形成に関して多くの刺激を受けました。お互いの研究テーマや研究の進め方を共有することは、自身の研究活動を客観的に振り返る機会にもなったことから、今後もつながりを大切にしていきたいと感じました。今回の学会参加を通じて得られた学びを今後の研究活動や臨床実践に活かしながら、より一層研鑽を重ねていきたいと考えております。

2025年8月9日～11日にかけて、第10回国際家族心理学会・第42回日本家族心理学会に参加しました。今大会は東北大学で開催されたため、宮城教育大学で開催された前々回大会以来の仙台遠征となりました。仙台といえば牛タンやずんだもち、仙台っこラーメンなどご当地名物が豊富で、今回も大いに堪能しました。

家族心理学会への参加は今回で3回目となり、会場の雰囲気や発表時の緊張感には徐々に慣れてきましたが、今回は初めて英語でポスター発表を行ったため、初参加時と同じくらい緊張しました。発表中には、外国人の先生方が何名かポスター前で足を止めてくださいました。日本語で発表するときには、自ら声をかけて議論を広げることができるのですが、今回は英語力への自信のなさから声をかけるのを躊躇ってしまい、十分に議論を深められませんでした。また、ポルトガルの先生からご質問をいただいたものの、英語でうまく意思疎通ができず、掘り下げた議論に至らなかったことが心残りでした。今後は英会話力を磨き、国際学会に積極的に参加して、海外の研究者とも円滑に交流できるよう努めていきたいと思えます。

発表後の懇親会では、顔なじみの先生方と近況を報告し合ったり、初めてお会いする先生方に自己紹介をしたりと、有意義な時間を過ごしました。特に、初対面の先生に自分の名前や所属をお伝えしてもあまりピンとこられない様子でしたが、「狐塚先生の指導生です」と申し上げると、「おお、狐塚先生（君）の！」と歓迎くださり、昔のエピソードをお話しいただけることもありました。指導教員が著名な方であることのありがたさを、改めて実感する機会となりました。

日本家族心理学会 第42回大会・国際家族心理学会 第10回記念大会の運営に携わらせていただいたこと心より感謝申し上げます。若島先生、高木先生をはじめ、多くの先生方やスタッフと協力し合い、円滑かつ充実した大会運営が実現いたしました。私にとっては初めての国際学会への参加となり、参加された方々との交流を通じて、学びを深められる貴重な経験となりました。

シンポジウムでは、Christy先生をはじめ国際的に活躍されている先生方から、専門分野における豊富なご経験と示唆に富むご講演をしてくださりました。ポスター発表やワークショップでは、参加者間で活発な交流があり、さまざまな視点や専門分野が交わる多彩な議論と情報交換が行われました。参加された方々は、最新の研究成果や実践的な知見に触れるだけでなく、今後の「臨床」と「研究」につながるヒントを得る有益な機会となったでしょう。

また、海外から参加された方々に日本文化の魅力を体験していただくために、「日本文化体験コーナー」として茶道と合気道を披露致しました。実際に体を動かしたり、所作を体験したりすることで、日本文化の奥深さや精神性を肌で感じていただき、異文化理解や国際交流のひとときとなりました。体験を通じて自然に会話が生まれ、参加者同士の距離がさらに縮まったように思われます。

8月10日（日）に行われた懇親会では、和やかな雰囲気の中でレクリエーションや歌唱も披露され、大いに盛り上がりました。世代を超えた交流が生まれ、学術的な話題から日常的なエピソードまで幅広い会話が交わされ、会場は終始笑顔と活気に包まれていました。参加者同士の親睦が深まり、大会を振り返りながら交流を楽しむことで、有意義な時間を共有することができたと感じております。

最後になりましたが、今後の発展につながる実りある大会となりましたことを、ここにご報告いたします。

アットホームで素敵な国際学会

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 江副文美

はじめまして。ニュースレター初参加のえぞえあやみです。高齢者介護をはじめとする家族とケアの問題を研究テーマとしています。今回、同じ名古屋大学の狐塚先生に誘っていただいて、IAFPにて、高齢の親を介護する息子の体験過程についてポスター発表をさせていただきました。

初めて訪れた仙台は、杜の都と称されるだけあり、とても美しい街でした。車線の多さは、名古屋とも似ていて、親近感も覚えました。ポスター発表では、国内外問わず、さまざまな方に興味をもっていただけたことが、とてもうれしかったです。そして、何より励みになったのは、先生方ご自身あるいは身近な方が実際に介護に向き合っておられて、非常に切実に、また共感的に、私の知見に耳を傾けてくださったことです。それは、まるで井戸端会議のような、気さくで、あたたかく、楽しい時間でした。理論や方法論について議論することは、アカデミックな研究の世界において不可欠なことです。しかし、そこに固執すると、小難しく頭でっかちな議論になってしまい、市井の人々の声が置き去りにされてしまうこともあるかもしれません。家族の心の問題を扱う研究者は、家族の中で実際に生きている一人ひとりの生の声を大切に扱っていく必要があると私は考えています。

IAFPにて、先生方の柔軟で感受性豊かな、現実を見る眼差しに触れることができ、また研究をがんばっていると思える、有意義で素敵な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました！今後ともどうぞよろしくお願いたします。

JAFP と IAFP 合同大会に参加して

名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 狐塚貴博

町も大学もきれいで整っているにもかかわらず、会場には活気があふれていました。自分自身の研究内容やモチベーションを高めるような、良い議論もたくさん交わすことができました。さらに、懇親会の料理のレベルが異常に高く、宮城県を存分に満喫した気分になりました。これが、JAFP と IAFP の合同大会に参加して感じた、率直な感想です。

そもそも、東北大学の川内キャンパスにこれほど長く滞在したのは、いったい何年ぶりだっただろう。同輩や後輩、先輩、そして先生方と過ごした日々をふと思い出し、とても感慨深い気持ちになりました。同時に、今もなお、当時とあまり変わらないかたちで学術活動を続けられていることに、あらためて感謝の思いが湧いてきました。

講演やシンポジウムはどれも非常に興味深く、時宜を得たテーマが数多く取り上げられており、発表や意見交換を通じて多くの刺激を受けました。なかでも、ポスター発表の会場で交わされていた活発な議論が特に印象に残っており、「これこそが大会の醍醐味！」と改めて実感いたしました。

あっという間の3日間ではありましたが、今なお前向きな気持ちで日々の業務に取り組む原動力となっております。こうして、研究や臨床に向き合う姿勢を新たにさせてくれることも、年次大会の大きな意義のひとつであると感じております。

最後になりますが、大会長の若島先生をはじめ、平泉先生、高木先生、大学院生・スタッフの皆さま、実り多き大会を企画・運営してくださり、誠にありがとうございました。皆さまの細やかなお心配り(さりげなく用意されたおにぎりには、ただただ脱帽でした)と、丁寧かつ洗練された運営のおかげで、心から充実した時間を過ごすことができました。これからもよろしくお願いたします。





日本家族心理学会第42回大会@東北大学 参加報告

会津医療センター心身医療科 心理判定員 楢木雄史

大会1日目 8/10 (土)

ほぼ1日を通して、メイン会場のプログラムに参加しました。

Buchanan先生からは、「思春期の子どもはほとんどは、実は、素行がよく、抑うつが高く、自尊心がやや低いものの、親等が思春期の子どもに対して、リスクをおかす可能性がある」と予期すると、子どもがリスクをおかす行動を増やしてしまう」といった知見をうかがい、驚きました。また、「思春期の脳は可塑性 (plasticity) があり、見込みと可能性の時期」と捉えることを推奨されており、親や学校の先生などが、思春期の子どもを、ネガティブに見すぎないようにすることが重要と考えました。

家族心理学会企画シンポジウムでは、夫婦や親になるには、恋愛関係とは違って本当に努力しなければならず、そのためには、カップルや親教育が早期から必要であり、プレコンセプションケア (妊娠前のケア) に、家族療法家が入るべきでは、といったディスカッションがなされました。

大会準備委員会企画シンポジウムでは、文化人類学の川口先生から「家族の再生産を前提として設計されてきた社会から、いかにあろうとも尊厳を持って生きる」という方向を目指している話、心理職の鴨志田先生からは、「子どもをもってよかったと思うこと」の調査結果から、「子どもと自分の成長につながる」等の話が印象に残りました。ディスカッションでは、兪 (ユ) 先生から、「韓国も少子高齢化が進んでいるが、日本との違いは、国が消滅するのではという危機感があるから、いろんな対処をしている」、指定討論の布柴先生からは、「IPの症状は、家族の関係の質・家族神話・家族の歴史等の意味づけを大きく変える起爆剤的役割を果たしているともいえる」等の意見交換がなされました。その他、お抹茶試飲、合気道体験、懇親会にも参加し、小職自身がこの学会に対面参加するのが8年ぶりのため、懐かしい方も含め、多くの方と直接交流することができ、充実した時間となりました。

大会2日目 8/11 (日)

2日目は、ワークショップ、クロージングセレモニー等に参加しました。

ワークショップは、吉田沙蘭先生の『がん等身体疾患をもつ患者とその家族のサポート』に参加しました。ここでは、がん医療におけるアセスメントとしては、患者本人については①身体症状、②精神症状、③社会経済的問題、④心理的問題、⑤実存的 (生き方に関する) 問題を行い、包括的アセスメントをすることが重要であること、(患者の) 病気への罹患が家族に与える影響としては、①役割の変化、②コミュニケーションの変化、③対人関係の変化について考える必要があることを学びました。当院での緩和ケア病棟における業務は、現時点では、病棟医師から依頼のあった方の心理カウンセリングにはほぼ限られていますが、改めて、よりお役に立てる働き方を考えたいと思いました。

その他、オンラインで、自主シンポジウムを中心に視聴し、中でも、『三澤文紀・久保順也・石井宏祐・三谷聖也 (2025) ブリーフセラピー (BT) の伝え方』が、ブリーフセラピーの学び方と、日常への応用を考える意味で、最も勉強になりました。

若手研究者のための研究助成支援事業 採択おめでとうございます！

日本家族心理学会では、2025年度より、当学会会員の若手研究者の研究活動を支援するため、「若手研究者のための研究助成支援事業」として研究費の助成を行うこととなりました。

○応募資格

応募時点において、入会后2年以上が経過した35歳未満の正会員が単独で行う研究

第一回の採択結果を受けて、「よろこびの声」をおうかがいしました！

助成をうけて

常葉大学 清水溪介

この度、「心理ネットワーク分析による青年の摂食症傾向と家族構造との関係性の検討」という研究課題において、「若手研究者のための研究助成支援事業」に採択いただきました清水です。このような貴重なご機会とご支援をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。また、大変お忙しい中で、ご選考いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

本研究課題は、青年の摂食症傾向と家族構造・機能の関係性を心理ネットワーク分析によって検討することを試みるものです。心理ネットワーク分析とは、心や現象を「様々な要因が複雑に相互作用しあうネットワーク（システム）」として捉え、その全体の構造を、数量データを用いて推定・可視化するアプローチです。端的に言えば、複数の要因同士の複雑な関係性を、複雑なまま理解しようと試みるアプローチといえます。これまで、多くの家族心理学的研究では、家族を「そこに属するメンバーや諸要素の相互作用からなるシステム」としてとらえる家族システム理論が理論的背景として置かれてきました。一方で、実際の分析等において、システム内の諸要因の相互作用を十分に検討できているかという様々な制約による限界があったのではないかと考えられます。今回、近年の心理学領域で注目されている心理ネットワーク・アプローチを用いることで、母子間、父子間、夫婦間といった各二者関係間の勢力関係や結びつきといった家族構造・機能の諸要素の相互の複雑な関係性をより詳細に踏まえた検討が可能となるのではないかと問題意識から、研究を着想いたしました。本研究の成果を通して、家族心理学研究における今後の展望を含めて、諸先生方と様々な議論を行えることを楽しみに、研究に取り組んでまいりたいと存じます。

また、余談にはなりますが、私はこれまで主に「障害児・者のきょうだい」をテーマとした研究に取り組んできました。そして、昨年度までは大学院生という立場であり、様々な制約（時間、研究資金等）から、どうしても自分の主とする研究テーマを優先せざるを得ない状況にありました。しかし、本助成に採択いただけたことで、これまで実施に至らなかった新しい研究テーマに挑戦する機会を得ることができました。

改めまして、本助成制度が創設され、そして採択いただいたことに心より感謝申し上げますとともに、ご期待に沿うことができるよう一層励んでまいります。



若手研究者のための研究助成支援事業に採択をいただいて

高知大学学び創造センター 牧野 裕也

この度は、研究助成に採択していただき、誠にありがとうございます。私の研究課題に一定のご評価を賜りましたことを、大変嬉しく思うと同時に、益々身の引き締まる思いであります。今回、採択にあたり寄稿の機会をいただきましたので、簡単ではありますが、研究の概要を紹介させていただきます。

私は、新婚期夫婦において、夫婦関係幻滅感という概念が、いかにして生起するのかに関心を抱いております。これまでの先行研究では、夫婦関係における満足度の低さや葛藤の多さといった、夫婦内の要因からの検討が中心となっていました。これに対し、私は、原家族の親に対する愛着不安が夫婦関係幻滅感に影響を及ぼすのではないかと仮説を立てています。すなわち、原家族の親との未解決な問題が配偶者に投影され、夫婦関係に困難をもたらすという視点です。

今回は、愛着不安と夫婦関係幻滅感との因果関係を実証的に明らかにすることを目的とした研究課題を申請いたしました。本研究により、将来の夫婦関係を検討するうえでも、親との安定した愛着関係を構築することが重要となると示し、青年期におけるメンタルヘルスの向上に資する研究などへの展開が期待されます。また、今後は、愛着理論における保護要因を援用することによって、夫婦関係の維持・安定に寄与する新たな知見を創出できるとも考えています。

今回の採択を励みに、引き続き新婚期の夫婦関係の安定に資する研究を誠実に進めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

※本助成の詳細は、学会HPにてご確認ください

学び多い大会！
楽しい懇親会！



家族心理学研究について

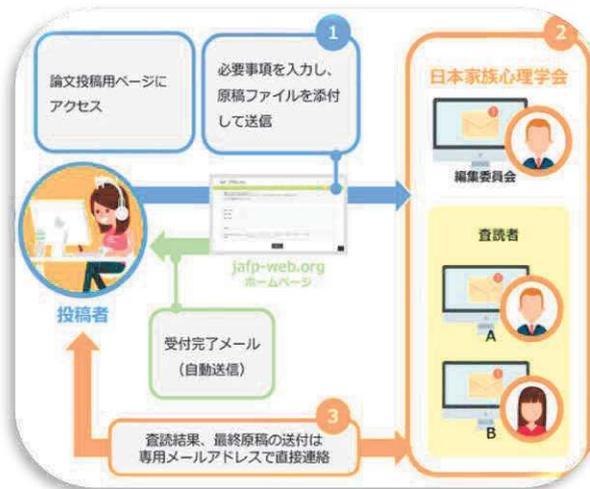
このたびは、投稿後の対応およびお問い合わせへの返信が滞る事態が生じたこと、深くお詫び申し上げます。

自動返信システムの確認体制を見直すとともに、副編集委員長および編集事務局補助の担当体制を再整備し、対応の強化を図ってまいります。

今後は、投稿後3か月以内を目安に査読結果をご連絡できるような努めてまいります。

また、査読依頼や編集部からのご連絡は、エディター経由で送信される場合がございます。迷惑メールフォルダに振り分けられることもあるため、恐れ入りますが定期的なご確認にもご協力いただけますと幸いです。

多大なるご迷惑とご不安をおかけいたしましたこと、重ねてお詫び申し上げます。



事務局通信

会員の皆様、いつも学会活動にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

昨年から、猛暑にクマ出没、大雪警報、インフルエンザA・Bの流行、そしてコロナもまだ油断できない状況と、落ち着いた日々が続いております。どうぞ皆様、引き続きご自愛ください。

さて、2025年度の年次大会には、多くの会員の皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。ここ数年は対面でのご参加も増え、受付で直接お声がけいただく機会も多くなりました。皆様のお顔を拝見し、言葉を交わせることは、事務局にとって何よりの励みです。

2026年度の開催地は京都の龍谷大学です。大会は、事務局と会員の皆様が直接お会いできる大切な場でもあります。今年もスタッフ一同、皆様とお会いできることを楽しみにしております。

まもなく「新年度会費のご案内」をお届けする時期となりました。本学会では2026年度より、事務局体制の変更に伴い、会員管理システムを新しいシステムへ移行いたします。そのため、例年、年度末にお送りしておりました会費のご案内やログイン方法の詳細は、2026年4月初旬にあらためて郵送にてご案内いたします。

また、これまで同封しておりました「郵便払込票」は廃止し、今後はご案内文の中で振込口座をお知らせいたします。

ご案内がお手元に届きましたら、ぜひ会員登録情報（特にご住所・ご所属先・メールアドレス等）のご確認をお願いいたします。変更がございましたら、新システム上でご自身にてご修正くださいますようお願いいたします。なお、現在も「あて先不明」で郵送物が戻ってくる方や、学会からの一斉メールが届かない方がいらっしゃいます。特にフリーメールをご利用の場合、迷惑メールとして振り分けられてしまうことがあるようです。確実に添付資料付きメールを受信できるアドレスをご登録いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

新しい会員管理システムへのアクセスには、**ID・パスワードでのログイン**が必要となります。4月にお送りするご案内をご確認のうえ、必ず一度ログインしていただきますようお願いいたします。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 日本家族心理学会事務局

〒113-0033 文京区本郷 2-40-7 YG ビル 5F

TEL：03-3812-1575 火曜・金曜日のみ

事務局長 浅井 継悟 事務局員 谷口真知子

発行年月日:2026年3月3日（アップロード）

発行者：〒113-0033 東京都文京区本郷2-40-7 YG ビル5階

一般社団法人日本家族心理学会 代表者 佐藤 宏平

TEL&FAX 03-3812-1575

(c)著作権：(2023)日本家族心理学会

NL 発刊、遅くなってしまいお詫び申し上げます！

ご寄稿、ありがとうございます。

(NL 編集 東本愛香 🍷)